様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６０６
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２００３５

研究課題名（和文）アプレイウス及び中期プラトン主義からみる行為決定における超越的契機の研究

研究課題名（英文）Research into the transcendental occasion for choice of action from the points of view of Apleius and other middle Platonists

研究代表者
小島　和男（KOJIMA, Kazuo）

学習院大学・文学部・准教授

研究者番号：８０３８３５４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,100,000円、（間接経費）　930,000円

研究成果の概要（和文）：研究成果の概要は以下。A)学会及び研究会での発表三回(平成23年度、平成24年度、平成25年度)、B)論文四本(全て査読あり、平成23年度一本、平成24年度一本、平成25年度二本)、C)国際学会への参加(平成25年7月、イタリアで開催された国際プラトン学会)、D)合同研究会開催一回(平成25年12月)。
上記のうち、A)に関しては、研究対象の特殊さを考慮しても一定の成果を達したと言える。B)に関しては、平成26年度以降にもこれまでの研究を踏まえ作成が予定されている。またD)に関しては、代表者、分担者以外に研究者四人を交えたもので、多数の参加者による活発な質疑応答が行なわれた。

研究成果の概要（英文）：This is summery of result of the project of grant for scientific research. It was achieved by two investigators, Kazuo KOZIMA (Principal Investigator) and Osamu KANAZAWA (Collaborator).
A) Reading three papers. 1) The theory of Time, (November 2011 at Sophia University); 2) Vedagu and Trojan horse, (June 2013 at Taisho University); 3) Some notes on Calvenus Taurus, (December 2013 at Gakushuin University). B) Four published papers. 1)'What is a numerical Soul?', (Neoplatonica,2012); 2)'A Reexamination of the Middle Platonists' Theory of Time, (Neoplatonica,2013); 3) 'Vedagu and Trojan horse'.(Studies in Comparative Philosophy, 2014); 4) 'Society Composed of Deities and Human beings', (Studia Classica, 2014). C) Participation to National conference; International Plato Society, 15th to 19th July at the University of Pisa, Italy. D) Holding a domestic conference; 21st December 2013 at Gakushuin University.

研究分野：西洋哲学

科研費の分科・細目：基盤研究(C)

キーワード：アプレイウス　中期プラトン主義　ガイウス

１．研究開始当初の背景
本研究が扱う、紀元後二世紀の思想家であるアプレイウスおよび一般に中期プラトン主義と言われる哲学思想は、我が国で盛んである古代ギリシア・ローマ哲学研究に於いて、思想史的、さらに哲学思想の通史的観点から、或いは個別研究と言う観点からも、専門研究者が十分にはおらず、従って研究が脆弱な分野である。具体的に言えば、ギリシア哲学〔ギリシア語で書かれた哲学〕に於いては、いわゆる「ソクラテス以前の哲学者」にしても、プラトン、アリストテレス、或いはストア派、懐疑主義であっても、またプロティノスをはじめとした新プラトン主義思想にしても、また諸教父にしても、翻訳はもちろんのこと、個別研究にしても既に非欧米圏としては相応の実績を伴っている。これに比してアプレイウスについては、翻訳活動については文学的作品が主で、思想的側面からの研究はほぼ皆無である。またアプレイウスが時代的な意味で属する中期プラトン主義については、例えば欧米圏で読まれているディロンによる *The Middle Platonists*, London（『中期プラトン主義者たち』）のような外観的な思想史研究はもとより、それ以外の個別研究さえ、ほぼ行われてこなかった。このような背景のもとに、本研究は、アプレイウスおよび中期プラトン主義について、研究を行なうものとした。

２．研究の目的
既に研究背景を述べた際に記したことであるが、本研究が目指したものは、我が国のギリシア・ローマ思想研究の中でも脆弱であるこの分野の補完的研究である。これは本研究が携わるアプレイウスおよび各思想家の個別性を具体的な特徴を持って描き出し、それによっておろそかにされがちな彼らのあいだの思想的差異を判然とさせることである。しかしこれを目的とすることは、本研究が、この分野を補完することで、ギリシア・ローマの古代哲学全般を通史として明るみに出すことをも目指したものであると言えよう。
具体的に言えば、アプレイウスについては、*Metamorphoses*（『変身物語』）など文学を描いた作家としてではなく、*De Deo Socratis*（『ソクラテスの神について』）、*De Platone et ejus Dogmata*（『プラトンと彼の思想について』）、*Apologia*（『弁明』）など、哲学思想を描いた思想家として取り上げることにある。つまりその分野を代表する個別作品の読解作業を通じて、彼の思想の背景であり核となっている、プラトン主義の実態を考察するわけである。そしてこのアプレイウスについての考察は、とりわけ行為選択という場面に研究の中心を絞り、そこに働く超越的契機という概念を突破口にして研究を行なうことを目的としている。
またアプレイウス以外の中期プラトン主義については、プルタルコスとアッティコス、さらにはガイウス学派の筆頭と位置づけられるカルウェヌス・タウルスなどを個別的に取り上げ、特定の問題に対してどのような見解を、どのようなプラトン解釈に基づいて主張していたか。そしてさらには時間的に前後する中期プラトン主義者たちのあいだで、どのような教義が維持され、どのような変更が為され、またどのような議論の応酬が為されたかを、個別的に明らかにすることを目的にしている。

３．研究の方法
本研究が扱う対象が哲学・思想であることから、現代に残された書物を読解することが、本研究の中心的な方向である。
具体的に言えば、アプレイウスについては、研究の目的で述べた彼の哲学思想家的側面を代表する各作品、*De Deo Socratis*（『ソクラテスの神について』）、*De Platone et ejus Dogmata*（『プラトンと彼の思想について』）、*Apologia*（『弁明』）の読解作業となる。これらの作品は全てラテン語で記されているため、かかる古代言語の日本語への翻訳という作業を基盤に、本研究の中心である読解作業は進められる。しかし同時に、各国で使用されており、本研究のアプレイウス読解作業の底本となっているボージョーのテキストそのものを全面的に信頼すべきではなく、その限りでテキスト校訂という側面も、付帯的ではあるが、関わることになる。さらにまた本研究の中心的な要素として、行為選択における超越的契機に着目している以上、読解に際しては、この観点からそれぞれの文脈を意味づける作業もまた必須であるが、これは作品全体を見通すパースペクティヴも必要となるために、部分と全体を常に勘案した作業となる。
中期プラトン主義者についても、既に名前を挙げた、プルタルコス、アッティコス、カルウェヌス・タウルスなどのプラトン解釈の実態や差異を、テキストに即して読解することが本研究の中心的方法となろうが、ここにはテキスト的な問題が局所的に存在している。散逸した文書があるとはいえ、プルタルコスは非常に多くのものが残っており、この点では問題はない。しかしながらアッティコスについては、彼の反対者による引用断片が中心となって現代に伝わっているため、彼の思想を復元する際には、いわば反対者の偏向を除去する必要があるのである。従って、幾多の証言を基に、このバイアスを除いて彼の思想に迫ることが読解作業の中心となっている。カルウェヌス・タウルスも状況は類似している。但し、アッティコスの場合が反対者の引用が中心であるのに対し、タウルスの場合は、賛成者の引用である点では偏向の問題は少ないと言える。けれども、タウルスの場合、極端にその引用や証言が少なく、引用者が関心を示した幾つかのトピックスについては一定の思想復元ができるものの、それら相互

の思想的な関係性は認めづらく、従って全体像がはっきりしないという点に問題がある。

４．研究成果

本研究の成果は以下のとおりである。なお、研究成果を示す際に、学会・研究会における発表と雑誌論文での研究発表とは内容に密接な関係があるために、以下では両者を「成果」の一端として併せて示すことにする。

アプレイウスについての研究は、研究代表者によって主に行なわれた。この三年のあいだに全ての作品の哲学的読解分野の作品の読解には到っていないが、それはむしろこの思想家の作品の豊かさを示す意味では当然のことであると言ってよいだろう。しかしながら、個別に読解を行ない、とりわけ行為決定論における超越的契機という観点から、哲学思想家としての側面に光を当てるという、本研究の本来の目的は一定程度の成果を上げつつある。実際、研究代表者による、テキスト解釈と並んで校訂にも配視した読解の結果として、現時点ではその成果を公開するところまではいたってはいないものの、一定の蓄積がされていることを報告する必要があろう。この一部は、研究代表者と共同研究者によって開催された合同研究会でも示された〔下記の報告を参照〕。さらにこの成果は分担研究者にももたらされており、今後の研究に有効に活用される予定である。

中期プラトン主義に関する以下の研究は、主に分担研究者によって行なわれた。これはとりわけ三つの領域で結果を残したといって良いだろう。

(1)「中期プラトン主義の時間論」。

断片のみが残存する中期プラトン主義者アッティコスの時間論を、時代的にも直前の中期プラトン主義者プルタルコスの時間論と比較し、プラトン解釈としての異なりをテキストに即して実証的に示した。これは平成 23 年 9 月 24 日に新プラトン主義協会のシンポジウムに於いて「中期プラトン主義の時間論～プルタルコスおよびアッティコスにおけるプラトン解釈の構造～」というタイトルで口頭発表され、それに基づいて平成 25 年に「中期プラトン主義の時間論―アッティコスにおけるプラトン解釈の構造―」というタイトルで、新プラトン主義協会発行『新プラトン主義研究』第 12 号所収の雑誌論文となった。この研究によって明らかにされたのは、相前後するプルタルコスとアッティコスが、プラトン『ティマイオス』という同一の作品を解釈しながらも、前者は時間的な世界の始まりを認めず、後者はそれを認めるという、不一致点をテキストに従って明らかにしたことにある。そしてまた、後代の新プラトン主義者プロティノスが、アッティコスのテキストを読んでいたにもかかわらず、彼の時間論とはまったく反対の立場を表明していることが明らかとなった点もまた、この研究の成果の一端である。

(2)「ガイウス学派の人間論」。

中期プラトン主義者の中でも非常に不明瞭な学派であるガイウス学派の中心的人物であったと推定される、カルウェヌス・タウルスの思想について、断片テキストの読解と、断片保存者の思想的傾向性を加味して読解することによって提示した。これは平成 25 年 12 月 21 日に、研究代表者と研究分担者の共催による学習院大学で開かれた研究会に於いて「カルウェヌス・タウルスについての覚書--『ティマイオス』解釈を巡る中期プラトン主義での彼の立場について--」というタイトルで口頭発表された。この研究の成果としては、おそらく今まで我が国で中心となって取り上げられることのなかった彼の思想、とりわけ時間論と人間論について、後代に残された断片から、その二つの思想が、或る仮定を通せば有機的に連携する、一つの思想であることを示した点にある。

またこの研究の一環として、この中期プラトン主義者カルウェヌス・タウルスの断片保存者である、新プラトン主義者・イアンブリコスの数学と魂との関係については、平成 24 年に「数的なイデアとは何か？―イアンブリコスにおける魂と数学の関係を巡って―」、『新プラトン主義研究』第 11 号、新プラトン主義協会編の雑誌論文として、これもやはり断片となってしまった著書『魂について』に於いて述べられている政治思想については、平成 25 年度に「神々と人間との共同政体―イアンブリコスにおける神人思想を巡って―」というタイトルで、Studia Classica 編集部編『Studia Classica』第四号に雑誌論文として掲載された。

(3)「プラトン思想の空間的伝播の可能性」。

ギリシア・ローマ時代の非ヨーロッパ圏におけるプラトン思想について、プラトン『テアイテトス』で展開された内在原理による外部対象の感覚知覚理論について、非ギリシア語によって記されたパーリ語転籍『ミリンダ王の問い』との構造的類似を検討した。これは平成 25 年 6 月 16 日に「ヴェーダグーとトロイの木馬--『ミリンダ王の問い』における内的存在を巡って--」というタイトルで比較思想学会大会に於いて口頭発表され、平成 26 年に同じタイトルで比較思想学会編『比較思想研究』40 号所収の雑誌論文として刊行された。この研究によって明らかにされたのは、プラトン『テアイテトス』であれば魂と呼ばれ、『ミリンダ王の問い』であればヴェーダグーと呼ばれる内在原理と身体感覚器官および感覚対象の関係が、構造的にまったく並行的であることを、両作品の原典の読解によって明らかにしたことである。そして同時にこの研究の成果として、両者の構造的類似は、『ミリンダ王の問い』に於ける中心的人物であるミリンダ王が、アレクサンドロスの東征以降に成立したバクトリア王朝のギリシア人王メナンドロスと比定される以上、単なる偶然的なものではない可能性まで示唆した

点も挙げられよう。
上記の研究成果のほかに、特筆すべきものとして、以下の二点を挙げることが出来よう。一つ目は、研究代表者および研究分担者は、平成 25 年 7 月 15 日から 19 日にかけて、イタリア・ピサで開催された「国際プラトン学会」(International Plato Society) に参加し、現地及び海外の研究者と情報交換を行なった点である。これは本研究の中心となっているアプレイウス及び中期プラトン主義者の主な活動時期がローマ帝政期であり、またその場所がローマ帝国領内であったことを踏まえるならば、とりわけその研究の中心地であるイタリアの研究者と議論が出来たことは成果であるといって良いだろう。
二つ目としては、研究代表者及び研究分担者の共催として三年間の本研究を締めくくるという意味で、合同研究会を開催したことである。この会合は「アプレイウスおよび中期プラトン主義からみる行為決定における超越的契機の研究」というタイトルで平成 25 年 12 月 21 日 13 時より 17 時 45 分まで、研究代表者の所属する学習院大学の北二号館 10 階大会議室に於いて行なわれた。これは研究代表者および研究分担者以外に、この問題に関係がある国内の研究者四名を交えたものである。その四名と共に各自の発表タイトルを示せば以下の通りである。
小島和男〔研究代表者〕「中期プラトン主義とアプレイウス」
講演
左近司祥子〔学習院大学名誉教授〕「ソクラテスがダイモーンの話をするとき～『饗宴』を中心に～」
宮崎文典〔早稲田大学〕「プラトン『リュシス』における欲望の問題」
吉武光雄〔学習院大学〕「プラトンにおける知識の対象と信念の対象」
金澤修〔共同研究者〕「カルウェヌス・タウルスについての覚書～『ティマイオス』解釈におけるその特異性について～」
西村洋平〔京都大学〕「中期プラトン主義の＜プラトン主義＞と魂論～エウドロス、プルタルコス、アルキノオスを中心に～」

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）
(1)金澤　修
数的なイデアとは何か？―イアンブリコスにおける魂と数学の関係を巡って―」、査読有、『新プラトン主義研究』第 11 号、新プラトン主義協会編、平成 24 年、pp.81-94.
(2)金澤　修
「中期プラトン主義の時間論―アッティコスにおけるプラトン解釈の構造―」、査読有、『新プラトン主義研究』第 12 号、新プラトン主義協会編、平成 25 年 3 月、pp.13-19.
(3)金澤　修
平成 25 年度、「ヴェーダグーとトロイの木馬--『ミリンダ王の問い』における内的存在を巡って--」、査読有、『比較思想研究』40 号、比較思想学会編、平成 26 年、pp.108-117.
(4)金澤　修
平成 25 年度、「神々と人間との共同政体　イアンブリコスにおける神人思想を巡って」、査読有、『Studia Classica』、第四号、Studia Classica 編集部編、平成 26 年 3 月〔ページ数未定〕

〔学会発表〕（計 3 件）
(1)金澤　修
「中期プラトン主義の時間論～プルタルコスおよびアッティコスにおけるプラトン解釈の構造～」第 18 回新プラトン主義協会大会、平成 23 年 9 月 24 日、上智大学
(2) 金澤　修
「ヴェーダグーとトロイの木馬」、比較思想学会第 40 回大会、平成 25 年 6 月 16 日、大正大学
(3)金澤　修
「カルウェヌス・タウルスについての覚書『ティマイオス』解釈を巡る中期プラトン主義での彼の立場について」、「アプレイウスおよび中期プラトン主義からみる行為決定における超越的契機の研究」研究会、平成 25 年 12 月 21 日、学習院大学

６．研究組織
(1)研究代表者
小島和男（KOJIMA Kazuo）
学習院大学　文学部 准教授
研究者番号：

(2)研究分担者
金澤　修（KANAZAWA　Osamu）
東京学芸大学　教育学部 研究員
研究者番号：60524296